【資料紹介】杉浦非水による『明治四十三年日記』について

青木朋子

一．はじめに―日記の概要

愛媛県美術館が所蔵する杉浦非水コレクションは約七〇〇〇件に上るが[1]、その中には画帳や日記なども含まれている。現在当館の区分上、三十七冊の画帳が残されているが、そのうちの二冊には日々の様子が記されている。本稿では、そのうちの明治四十三年（一九一〇）[2]五月七日から三十一日に書かれた日記（図1）を翻刻し、その注釈を行う[3]。

本作は、縦十五・〇×横二十三・二×厚さ一・四cmの横開きのスケッチブック。表紙裏には、神田の文房堂のシールが貼られている。縦書きでその日の出来事が記載されている。文字情報だけではなく、絵や俳句が記されている日もある。何枚か外れてしまっているページもある[4]ため、日記に書かれた日付を参考にしたうえで考察を行う。

日記は、まず日付、天気を一行目に書き、仕事の内容（誰に会い、どんな図案を作ったか等）、何時に退勤したか、夕食をどの店で取ったか、帰宅後に起きた出来事にいたるまで細かく記載している。仕事が休みの日も朝からはじまり、その日の出来事を仔細に書き残しており、非水の几帳面な性格があらわれた日記である。またその日考えた俳句や簡単なスケッチを日記の前後のページに描くこともある。

日付を書かずに俳句ばかりを書いているページもあり、当時『ホトゝギス』や『日本及日本人』を熱心に読んでいる記述があるため、俳句作りに傾倒している様子が窺える。またこれまであまり語られてこなかった、実父・朝忠と祖母に会った日の記述もあり、大変貴重な史料であるといえる。

非水は六十歳の時に雑誌『広告界』において「自伝六十年」という自叙伝を一年間にわたり連載している。事細かに書かれた文章からは、記憶を頼りにしたものだけではない様子を感じる。そのため、この自叙伝を書くにあたり、非水がこの日記の類を基礎にしたのではと推察できる。同自伝内で明治四十三年については、三越図案部主任として手掛けた仕事や埃及研究会について、黒田清輝、中澤弘光について等の記載がある。「自伝六十年」において、日記の内容と特に一致するのは「ハレー彗星」についての記述部分である。

> 五月には「ハレー彗星」が出現すると云ふので大騒であつた。七十五年目に一回の出現と云ふので、どうかすると一生涯の内にお目にかかられずに済むかも知れぬと云ふのであるから、噂は大げさである、ハレー彗星が半衿や風呂敷や手拭にまで図案されて売出されたと云ふのも、つまりは猟奇趣味の現れに外ならぬ[5]。

以下で紹介する日記の五月十四日の項目には、ハレー彗星についての初めての記述が残っている。それ以降も、十九日から二十六日まで、二十九日から三十日

までと計十一日に渡りハレー彗星関連の文章があることから、非水がこの件について大きな関心をもっていたことが窺える。また自伝にある通り、二十一日付けの日記内には「けふは彗星の図按を半襟にやって見る」と記している。手拭については、五月二十三日付けで売り出し予定の手拭へ巌谷小波に一句書いてもらい、三十日にこの彗星図案の手拭が完成したとある。残念ながら現在この手拭の所在はわからないものの、こういった記述をもとに新たな作品が発見される可能性は今後残っている。

そういった意味において本作は、若かりし頃の非水の活動を端的に物語る、貴重な史料である。本作については、これまで図録の図版において紹介されたことはあったものの、その詳細な内容については言及がなく[6]、本稿において初めての翻刻と注釈を行う次第である。ただ、本作の内容については、未だ明らかにできていない人物や事柄も多い。本日記だけではなく、非水が欧州へ留学した際の日記（『滞欧日記』）や同時代の文献資料をあわせて調査することにより、今回明らかにし得なかった部分の解釈を進展させるとともに、更なる杉浦非水研究を今後すすめていきたい。

二.『明治四十三年日記』翻刻

【凡例】

・漢字表記については原文を尊重し、旧漢字や旧仮名を改めずに翻刻した。
・句読点はなるべく原文を尊重した。
・濁点については、補わず原文をそのまま表記した。
・繰り返し記号は、原文をそのまま表記した。
・判読できなかった文字については■でこれを表記した。また非水による漢字の誤記と思われる部分については（　）を用いて補った。
・俳句の文脈を損なわないためにも改行は可能な限り史料に基づいて行い、頁の区切りについては行間を空けることにより表記した。
・本文中には、今日の観点からみると差別的表現ととらえかねない箇所が散見するが、日記制作時の時代的背景を考え合わせ、また故人であるという事情に鑑み、原文どおりとする。
・本文翻刻後に語句の注釈をつけている。

【本文】

五月七日土曜日　三越[7]が休暇で目黒へでも出かけやうと思ったが胃病を起してしく〳〵するのと天気か曇ったので止める
「柱にそめし白萩の歌」とでも側へ書いてくれと翠子[8]の注文だか
そんな心持の図でもなさそうだ
生垣に日の目疎や萩若葉（図2）

代書生
遅き日の筆かみ雑（ママ）（殺カ）す欠伸かな
髯とりて病餘の鏡冴返る
艸に臥せば鼻の先ホの壺菫
長閑さの鼻毛も延ひて端居かな
泥絵具皿に干破も陽炎へり

薫風に端坐す新衣ほこりがほ

五月八日　日曜日　金子[9]さんの奥さんが見へた
かほるさんの顔（図3）

五月八日　日曜　晴天

朝金子の奥さんが赤ん坊をつれてみへた翠子は奥さん
と一所に教會にいく
神田文房堂[10]へ廻って店へ行く
英皇帝御崩御の報[11]来る
岩崎兄上[12]店へ面会に来らる剛一[13]徴兵の免かるとて大喜なり
夜大槻君[14]来る　善光寺[15]縁日にて草花なと買う

五月九日夕　久留島福子ここのつ（図6）

五月九日月曜　細雨
朝少女世界[16]の絵をかく
電車で日比谷公園の処へくると八日は愛国婦人会[17]の総会がある
と見へて盛粧した婦人か群集して居る
電車の中て句を作らうと思つて桜田門辺の景色を見ると
先日まで黄色だった柳が青く房々と垂れて居るので
もう夏柳の感じだ　数寄屋橋辺の濠が干潮で泥の臭
気が街中を流れる一向句が出来ない
五時退出
夕方久留嶋[18]の奥さんか福子さん[19]をつれてくる
久留嶋君の幼稚園[20]は五日から開園したので久留嶋君が
くたびれた顔をして夜八時頃くる

十一日夜　喜代子女子来る

五月十一日水曜　強雨
目かさめると車軸を流すやうな雨
店に出ると店も雨漏りで博覧会場[21]は油紙だらけである
時々日か射すが間もなく強雨が来る
夛加楽亭晩饌
天下堂[22]の活動写真を見る伊太利の鰯の大漁なと
面白し帰路麹町製本屋に寄る
帰宅して見ると神東夫人[23]か来て居た
十時過先日周旋した新婚のおいささん[24]が来られた
猿橋の風景の話などよりも新たに家庭の人となった
心配話に花が咲く
夫が中学の校長で先の亡妻君がやり手だったので其
後に入って趣味の変った家庭に處して行くのは自分に
は大分荷が勝ち過きるとおいささんが愚痴る
どこ迄も女は女である　うまくやって貰ひたいと心ひそかに
祷る
お里かへりのおいささんを迎へて十二時迄話す
抜露次の暗に関なし猫の妻
抜露次の灯あるを関に猫の戀
どちらが句に成って居るか自分にも判断がつかぬ

五月十二日
次の四畳半でおいささんが朝の化粧
をする（図7）

五月十二日木曜　晴
朝早稲田の本の図案[25]出来友（ママ）（有カ）朋堂[26]に郵送す
十一時出勤訪問者大野雲外氏[27]未開土人の模様応用の件

にて会談
今日は一日暑気八十度以上にて仕事手につかず
午后帰路銀座発明舘[28]に立寄
銀座には最早大道商人のアイスクリームを売るあり打水なとして夏の景色である
夜理髪入浴
腹具合が大分良くなって来た
薬飲まぬ餘病も春惜しむ夜や

五月十三日金曜　曇
先達から大野雲外氏が未開の人種模様を実際のものに応用して見たいと云ふ話を持込まれて居たので其手初めに中形浴衣でもと磐瀬[29]とアイヌの模様を中形に作って見る中々うまく行かん　小さな部分て見ると面白い奇抜なものだか中形になって廣き面積にうね〳〵と連絡すると目がぐら〳〵とするやうでどうも落付きが悪い
児童博覧会の食堂の油繪のバックの古物を幼稚園の壁画にしたいと久留嶋君来談
夕食金吹町福井亭
帰路神田へ廻る
五器に残る猫の肴も■知れり

五月十四日土曜　雨
朝久留嶋君お伽繪出版の件につき来談
新聞を見るとハレー彗星が段々近づいた明方に見へるとある
十九日頃太陽面経過すと
巷説に凶吉の星も明易き
彗星の拂ひ辻火に明易き
十時過出勤先日図按部参考図書購入案を提出して置いたのがけふ可決されたので早速丸善に電話をかけさして　Etude　de la plante son application aux Industries dart[30]　を買入れる
今日もアイヌ模様の中形図按[31]を二枚かく
夕刻帰路鍛冶町の猶乙の本屋に寄ってドウ井ッチクンスト[32]、モデルンクンスト[33]、だとかユーゲンド[34]なとを買ふ明後十六日の店員慰労休暇の酒肴料を今日受取ったので早速書物に化けてしまった兎に角酒を飲んだよりは心の愉快は大きいと感じる
夜中沢兄[35]より来書　兄の画いた僕の肖像[36]を画報社に貸してやってくれとの事である美術新報の中沢号[37]に掲載さるゝのであらう僕は自分の名譽の如く喜こんで早速承知の旨の手紙を認めた中沢兄の成功は自分の成功の如く感するのは奇であるが友情であらう
今夜も一酌後の散歩に翠子と百合子さん[38]と三人で善光寺の縁日にいって石竹とつゝじを買った
おいささんは今日猿橋へ帰った

タツ子　十五日夜（図８）

五月十五日　日曜　曇
今日は自分の誕生日で三越を休暇にしてとこかへ遊ひに行かうと云ふ事になる　朝十時頃から宅を出た少しおそいか稲毛迄行

く事にする　両国の停車場から二時間か、つて稲毛につく
稲毛の海は泥海の遠浅なので濤の音もなく泥臭いにごった
景色に翠子は失望らしい色をする　海岸の群立つ松か
此所の特色だなど、慰める。泥濱の浅い潮の中に立つ華
表[39]は和田君の木太刀の挿画[40]で見た事があった
宮[41]の石段を上ると山鳥が一羽けた、ましい羽ばたきをして
飛立つ。今日は日曜の為に學生などか絵具箱を肩にし
て大分見へる。海気舘[42]の見晴らしのい、座敷で晝飯
を食ふ　誕生を祝する為に一本お酒をつける、庭先に渡
の乙女が蛤を賣付けにくる。松の林を透して曇った海
が見へる房州の翠黛が朧である、近く遠浅の濱には
小学校の生徒が蜊を掘って居るのが見へる。
宿を出で濱端の和田英作氏の画室のあと[43]をのぞいて見た
四時に帰りの汽車に乗る車中は甚混雑する。待宵艸
かレール挿んて咲いて居た　今日は絵もか、ず句も出来ず
車中て居睡りをして甚平和（平凡）な一日を送つた
亀戸で藤見の客群集を呑んだ我汽車は煤煙に充
ちた本所の街に走り込む
七時帰宅
竹貫君[44]来訪先日来眞田虫に責られた氏の顔は
衰へて見へる
濱庇松の花にも祝ぐ日哉

五月十五日　夜
さなだ虫退治の為
絶食して頬のこけた
竹貫佳水兄の顔
ゆく春や腹に居残るさなだ虫（図9）

町の灯や蛙鳴く田の夕明り
停車場の埒に煤けて松緑
はらむ帆に麦の穂ゆれや川を見ず
松濱の一路皐月の空光る
畔に上る蛭の袋に雫かな
蝸牛の小粒ながらは角目かな
橋渡る汽車隠れ行く若葉哉
濱の松林の若葉につづき鳧
梯子して家根に斥候や柳若葉
白壁に構へゆ、しき若葉かな
森うつる浄池にまばら蓮浮葉

五月十六日月曜　雨
今日は三越の春季慰労休暇で少しく寝坊をして居ると神東君[45]
に驚かされる。色彩新論[46]を貰う朝の間晴れて居たのが十時過
から雨になるさそ三越の店員が折角の休みを愉快に遊ぶ事
が出来ないので失望して居るだらうと思ふ雨の降り出す前
に庭いぢりをして居ると金子の奥さんがかほるさんをつれて
来る、烏瓜の種を蒔いて鬼灯を移植する秋の末に
赤い實が此十歩の庭を飾ツてくれる事だらうと楽しみ
である
近所の女の子か三人遊びにくるあんぱんを御馳走して写生
をする

晝飯後は折角の慰労の日だからと云ふので晝寝をした
慰労の為に貰った酒肴料は本を買いて昨日稲毛でつかつて
精神の慰労は出来たけふは身体の慰労である自分ながら
金と時間をうまく働かしたものだと思ふ中には随分酒肴
料がからだをいためて翌日休まなければならん人も出来
るだらうと思ふ何の慰労だかわからない
夜健造さん[47]がくる飛行機製作に熱中して居る中々
眞面目な青年だと思ふ来年中学を出たら工業学
校の機械科に入学したらいくだらうなど、勧める
唐紙の半切に何か画くつもりでやりかけだか物にな
なかつた
一茶の七番日記[48]を飛々に讀む、ざぶ〳〵と白壁洗ふ若
葉かな[49]と云ふのがある自分が昨日書付けた句も白壁と若葉
の配合だが一茶のは矢張一茶式だ自分のは蕪村調子
で少しく時世遅れの感じだか自分にはやはり自分の句の
方がい、と思つた

五月十七日火曜曇午后晴
朝　胡瓜と茄子の苗を買う翠子が庭の隅に掌程の
耕した土に二畝に植へる
九時に出勤児童博覧會がけふから閉鎖したので何となく
淋しい、約束して置たので画報社から中沢君の肖像画
を取りにくる。
けふは皿の図按をかく午后に土岐君[50]か来る
花村で夕飯を食ふ
銀座の夜店を少し斗り散歩して帰宅

翠子が米子[51]をつれて帰つて居た明日学校か休みで
宿りがけで遊びに来たのである
夜は長沢さん[52]の子供等が遊ひに来て散々あばれる
綾とりをする唱歌を唄う小学校のダンスをやる
衾に入ツて日本及日本人の一日一信[53]を讀む　碧氏[54]の不折俳画
評[55]か中々痛快である
先達神田の古本屋で不折俳画を見たから買うかと思つて開けて見ると
案外陳腐で所謂の俳画である目に馴れた平凡な飄ゲた趣
味のものが不折式筆法でなぐつてあるに外ならんので少しも新らし
い感じの現代的な俳画でないので失望して買うのをやめたが
碧師も同じ感じであったらしい。碧梧桐の句を一々とつて
俳画にしたので殊さら碧調の句と不折の画か不調和なことは
云ふまでもない　丁度ナポレオン一世が利休の十徳でも借着
したやうだらうと思う、碧師も云ふ如く不折は日本新聞時代
の方が寧ろ俳味が横溢して居るやうに思ふ。なまなか雪舟
の粉本などに沈溺して雪舟宗を天下に呼ふなどは不折の
堕落である

十六日夜　米子（図10）[56]

十六日夜　あやとり（図11）

五月十八日水曜晴
朝寝をして居ると米子が起きろ〳〵と云ふ　ひもじいから早く朝
ご飯を食べたいと云ふ。うるさいのでやつと起きる。子供の写生な
どをして九時頃から出掛ける。

けふは福井[57]がセルロイドの蓋の絵を持って来る　仕事としては
陶器の皿の図按とタイムスの木版[58]などをかく。
往復の電車の中で一日一信と日本俳句[59]を積讀する
普通の句集やほと、きす[60]などの句を見ると自分にも出来
さうな句斗りのやうな感じがするが此日本人の俳句欄を
讀む時はいつも及ばざる遠き感じである自然讀む事
に解する事に骨を折る事になるしかし以前に讀んた
時よりも解して面白味を感する事が深くなった自分も
それ丈の進境であらうと思ふ
帰途久留嶋君の宅に訪問する幼稚園が盛況で五六
十の小供を入る、には家が狭いので少しく建増しをやる事
になったと云ふ、今夜は同君の内で細川風谷[61]と筑風[62]の
筑前琵琶を招いたので来ないかと云ふ招きであるが自
分は仕事の為にやめて翠子とおしんをやる
夜土岐君から頼まれた理髪の本の表紙[63]をかく
十時過翠子帰る風谷の義士傳が馬鹿に面白かったと云う
てしきりに眞似をして居た
小林蹴月君[64]から書信で小説の繪を頼まれる
村一の宮若葉南洲照して

五月十九日　木曜晴天
今朝も金子の奥さんが来る今日は待にまつたハレー彗星か太陽
面経過の日である天空にいかなる現象が顕れるだらうかと云ふ事が一般
の好奇心に投じて到る処其噂斗りである。店に出ると早速硝子
板に蝋燭の油煙を燻しかけて一生懸命に太陽と睨みっくらを
するがたゞ鬼灯のやうに眞赤な太陽面に時々小さな雲の片がかゝるを
見る斗りで十一時二十分頃から十二時過迄見て居でも何物をも見る事
が出来なかった。朝鮮人などは鉄道でシベリヤ迄避難したとか
穴を掘って這入って居るとか馬鹿〳〵しい噂[65]があるがこんな事なら
何でもない少しく失望の気味である　彗星の尾に包まれて居
るのかと思ふと少しは太陽の光が弱いやうにも感するがそれは気
のせいであったらう
今日は記念の為に彗星を何かに應用した図按を作らうと思う
たが何も出来なかった
陶器の図按をかく。土岐君が露伴氏[66]の子供にお土産にする
玩具を買ひにくる。獨乙の書林の前田氏[67]が図按の本を以ってくる
夜は日此[68]藤村氏[69]の招待で蔵田やにいった。自分等には何の
面白味もないと云ふやうな色が藝者の顔に見へる実際藝者
自身はつまらないだらうがこんな顔色を見せるやふな藝者
は藝者としての堕落であると思った藝者美を発輝され
ない宴会なんかは実際客観的に面白くないものであるなど
と思った現代の藝妓などに白拍子的な女性美などを要求するのが間違
であるなどと思って見た
十一時前帰宅
電車の中にて
油箪かけて嫁荷つゞらや桐の花

五月二十日
英大帝御葬儀当日市中所見
英国大使
新聞記者
英国紳士

令嬢

五月二十日　金曜　晴レ少し曇

英大帝の御葬儀の日で店に出掛けに青山御所の前を通ると
皇太子殿下及妃殿下が陛下の御名代で築地の三一教会[70]の遥
拝式に行幸の処であった貴顕や軍人の盛装した姿が築地
に向って行くのに度々逢う門々の吊旗に市中は何となく寂し
い女学生や婦人の黒のリボンをつけたのが電車にちら〳〵見へる
朝家を出る前に金子さん夫婦が貸家を探しに行くとて
立寄る
けふも土岐君と印刷やが表紙図按の事で店にくる
鏡花集[71]の製本が五冊出来てくる
けふはタイムス臨時号の表紙[72]をかく藤村さんが今年は
彗星の出た年だから何か彗星の図按を商品につけて
紀念に賣りたいから製作してくれと云はれる自分もやって
見たいと思って居る処だから大にやって見るつもりで承諾する
翠子は久保田さん[73]と厳谷さん[74]に御無沙汰たづねに出掛けて
夕刻まだ帰って来ていないから獨り夕飯の食卓につく
今夜こそ彗星が見えると云ふので近所の子供達が大騒で
戸口に集って居たが八時を過ても見へなかった
青山三社の縁日で山グミを一本買った白緑の葉の裏に
ルビーのやふな少さな無数の赤い実がなって居るのが頗る美く
しい

五月二十一日土曜　曇

十時頃から少しく雨がぱら〳〵する、朝出掛に銀座のセルロイドの店
に立寄つて出勤した
沼田笠峯氏[75]来訪少女世界の表紙をかいてくれとのことである
けふは彗星の図按を半襟にやって見る
山田君[76]が児童博覧会の賞牌の原形を持つて来る
桃太郎の顔が角力取のやうで少しく困った米斎君[77]も同感だった
らしい
夕食は松喜
今夜も曇って居て彗星が見へない七十何年ぶりに出る星
だから何とかして見て置きたいのだか毎日見る事が出来んの
は遺憾である
夜竹貫君宅にいつたが門が鎖されて居たので帰る
寝る前にLe nu au Salonの廣告などを讀む佛語も
外国語学校を出てから彡年になるので大分忘れて居て一行
讀むのでも中々骨が折れる

五月二十二日日曜　晴

今朝冷へた為か少しく腸か痛むので神薬を買って出掛ける
神田の三才社[78]で佛蘭西の本を見やうと思って廻り道をしたら
けふは日曜て休業だった其足て鍛冶町の獨乙の本に寄ったら
それも日曜て休み　あの三才社の主人の兀頭がクリスチヤン[79]だらうと
は思はなかつた
今日は彗星図按を束髪の簪に応用して見る
来訪者は山田君と大野雲外君である
山田君からブロンズの胸身像を贈られた
帰って見ると風を引て翠子が寝て居るどうも気候の所為か
病人の彡いのには閉口だ

翠子が少し斗り下痢をして腹か痛むので困る、一体翠子ハ
没常識だ平常から心掛か悪いからだいくら僕が注
意しても駄目、どうせ駄目なら死んで終へお前か死んだら
今よりもう少し美人で才かあつて靴下の新品のを穿かせる
シヤツのボタンのいつもついて居るのを着せる心掛のい、妻君
を貰ふのだから乭しい
まあもう少しの辛抱だよ

輪廓内は翠子の筆なり

夜川越の兄さん[80]の店の廣告図按をかく

五月二十三日月曜　晴

朝出掛けにまた神田の三才社に寄つてアニモービバン[81]の虎と獅子の
一冊を購ふ鍛冶町の本屋を一見して店に出る
彗星の図按か出来たので重役に見せる早速製らして賣出
す事になる小波氏[82]が来て居られたので彗星の手拭[83]に一句
書いて貰う「明け易き空はかせたり箒星」「てつぺんも掛けて
はきけり時鳥」などであった
皿の図按をかく
午后帰りに青山一丁目迄くると電車の外て呼ぶ人がある
だれかと思へば岡野栄小林鐘吉[84]二君で夕食を一所にしやうと
云ふので下車する青山のいろはで一酌する
岡野君は仕事の都合で別れる小林君を同道さして帰
る十一時頃迄話す京都の舞子が友染の袂でおしげも
なくこぼれた酒を拭いたしみったれな京都を馬鹿
にして居た目を驚かせてそれから中沢君が其舞子
が大好になつて其女斗り写生したなどの話[85]に花が咲
く
けふは特筆すべき事がある僕の結婚後一日として束
髪ならざるはなき翠子の頭が今日は銀杏
返し[86]にいって居た髪の形で女は大変ちがつて見へるもの
だ　女中が結ったので形は悪いがそれでも束髪の
不美術的なのに勝る事遥だと思ふ[87]（図12）

五月二十四日火曜晴

朝川越の廣告画[88]を仕上げで出る
店で今日はタイムス臨時号の裏繪[89]をかく
伊せの畑喜門氏[90]から二見[91]の蒲鉾と伊せ特有の玩具を送られ
る
国の祖母[92]が上京したから帰りに立寄れと父[93]から電話か掛った
帰りに新冨町の父の宅に立寄る七年斗り逢はなかつた祖
母に逢つて元気らしい顔色を見て喜はしく思ふ八十九
才て遥々東京迄よく出掛けられたものである東京が骨
を埋める処になる事だらうと思ふ目も脳力を甚慥かだ
か耳が遠くなつたので充分に話をする事が出来んので顔
を見ては笑って居る斗りで何だか物足りなく思う元来
やさしいお婆さんがこんなに年をとるとまるで小児のやうになつ
てしまう母[94]などは佛様だと云っている夕食を一所にして
帰る　帰途薬種屋で話の聞こへる機械を探した
が中々無い
国からのお土産は蒲鉾とのみとり粉と五色素麺であった
けふは馬鹿に蒲鉾に縁のある日である
夜入浴、遠雷を聞く、勿論彗星は見へぬ

五月二十五日水曜　晴

今日はバロダ国王殿下[95]を宮内省が後楽園に御案内する日で其
余興として楽焼を三越へ頼んで来たので店からは久保田君と自分とそれから
板谷波山氏[96]とが朝十時迄に後楽園に集った有名な後楽園を
見るのは初めてなので一層驚いた九八家と云ふ亭で弁当を食う
て松原をうしろに菖蒲の花咲く池を前に楽焼のかまを据へた
十二時前王の一行が来られて例に依って署名を楽焼の皿に交
換する稲葉子爵[97]福嶌中将[98]などは毎度の楽焼の味を知って
いるので一番に筆をとる王も四五枚皆から皿や茶碗をおし付
けられてしきりに御名を署して居られた
三時過に楽焼が済んで店に帰る
夜図按部要件の話で磐瀬と末廣に會す
此夜初めて彗星を見る市中鼎の沸く如き騒である

五月二十六日木曜晴　夕刻より大雷雨なり一時間斗りにて晴渡る彗星雨後の空に輝く

今日はバロダ王妃殿下ニ楽焼を見せるので朝八時過から帝国ホテルに
出掛けた楽焼の焼始まる頃王妃殿下や王女殿下も出て来られて観
して楽焼の筆をとられた着物の仕合から額に紅を点じた処など
さなから釋迦を思はしむるのであったお付の秘書官の人に頼んでサンスク
リットで虎と云ふ字を盃に書いて貰った十一時頃から妃殿下一行は
市中見物に出られたので十二時頃帰途につく波山氏は今日は工業
学校[99]の記念日で多忙であるのに十二時迄楽焼にかくつたので大に閉
口したらしいがしか印度の王妃を見る楽しみに操合して出
て来られたのらしい晝飯を久保田君と黄川田で済まして
店へ出る大分疲労したので何も仕事をしないで五時前退出
した帰途砥石と印刀を購ふ
夜石印二顆（図13）[100]を刻る一はけふ書いて貰ったサンスクリットの虎と云ふ
字である、けふ書いて貰った時に米齋君に犬と云ふ字波山氏
は獅子と云ふ字を書いて貰ったが焼上げて見ると自分の分一つ
が満足に焼けて他の二つは形なしに流れてしまったので米齋君
など大に残念がって僕一人羨やまれたのであったがホテルの門を出
る時誤って取落して四つ斗りに碎けた甚タ残念した
今夜初めて彗星を明了に見る事か出来た昨晩は自分の
見た時はけふの程明了でなかつた先つ安心した　だん〳〵遠ざ
かるので明了ではあるが少さくなつたそれでもまだ三十度位
の長さに光の尾を見る事か出来た、次に地球に近つく時は七十余
年先の事であるからとても自分等の活ている間に見る事が出来ん
そう思うと名残惜しくいつ迄も眺めていたいやうである
1910年ハーレースコメット出顕記念に何か残して置きたいものだと
思ふ

五月二十七日金曜　晴

朝少しく躰の具合が悪いので十一時過迄寝る
十二時過店に出るけふは高等工業の記念会で磐瀬と一所に
二時頃から出掛ける大変な人出で埃と暑さとでとてもゆつくり
覧て居られなかった専門学校でもやはり小供らしい製作品
には微笑さる、ものが多い梅木[101]に逢う波山氏に逢う
四時頃店に帰る
夕刻帰宅今晩は早寝をした

五月二十八日　土曜　晴午后少しく雨

朝神田の古本屋が来る
朝九時頃出勤正午博文館に行く
小波氏に川越の馬方の持つ提灯を贈る[102]
夕食吉川
の牛肉を喰う

五月二十九日日曜　雨
今日は珍らしく早出をする店の時計か八時半過を指して居る時に
出勤したのは近来破天荒の事である昨日児童用品研究会[103]
繪本出版の参考書類購入案を提出して置いたのが可決に
成ったので早速博文館からお伽噺などの本を買入れた
午后は車軸を流すやうな強雨で自然店も客が少なかつた
帰途新聞社[104]による久しぶりにて社友と夕食を共にする
今日は軍神廣瀬中佐[105]の銅像除幕式があった日で須田町
辺は非常な雑踏だったそうだが朝来の雨で折角の余
興なども振ふ事を出来なかったらう
今夜は彗星が非常によく見へる長さも先日見た時より
長く見へる雨上りの透明な空気の為だらう

五月卅日月曜　晴
朝軍人世界[106]のさし繪をかく、早起をすると五月晴の庭が活々
として草の葉の露に爽快の気を覚へる、萩が大分延びた百合
も大きくなった十本宛（ずつ）植へた胡瓜と茄子が半分弱よりつかなかった、
出勤の途上数寄屋橋のキリスト教の本屋と銀座の教文館
で小供の繪本類を買う
来訪者は山田君と森脇[107]が学資金の為替を受取に来
た斗りである
今日彗星の図按をした手拭が出来た
夜隣の國ちゃん[108]をモデルにして少年世界臨時号（図14）[109]の
口画の凸版々下をかく

五月卅一日火曜晴
朝少年世界の口画を仕上げていると小林蹴月氏来訪
昨日迄湯河原にいって居たとのこと湯か原には大岡育
造氏[110]が病後保養の為轉居して居られるので遊ひにいった
のださうだ盆栽家だけに早速庭に下りて松の緑を切る
法方を示すといって下の方の枝だけ手入れをしてくれた
十時頃一所に宅を出る小林君は芝に立寄りとて虎の門
で電車で別れる
店で来訪者ハ山田君と小林鐘吉君だった
都合によると店で前橋の藝者演藝場の配景を
切受けるかも知せんと粗山君[111]の話しが有った前橋に一週間
斗りも配景をかきに出張するのも面白からうと大に乗気
になる

なお本稿をなすにあたっては、下記の諸氏に種々のご協力をいただいた（敬称略、五十音順）。相川順子、石丸耕一、上田一樹、折井貴恵、高曽由子、五味俊晶、杉山はるか、大明敦、長井健、宝珠史洋。末筆ではあるが、心より御礼申し上げる。

【註】

1　長井健「愛媛県美術館の杉浦非水コレクション」（『「生誕一四〇年　杉浦非水　開花するモダンデザイン展」図録』愛媛県美術館、二〇一七）参照。

2　年代の特定については、当日記内でハレー彗星について非水が記載しており、また同八日、十四日付けの日記でエドワード七世の訃報について記述があり、十四日については当時の東京の様子について詳細な記述があるため、明治四十三年（一九一〇）と同定した。

3　本作には非水によるタイトル表記がないため、本稿では、本作を『明治四十三年日記』と呼称する。

4　五月七日付け、八日付け日記の2ページ。

5　「自伝六十年（十）三越時代前期」（『広告界』第十二巻第八号、一九三五年八月、六九頁）。

6　なお拙稿「杉浦非水と同時代作家たちとの繋がり」（『杉浦非水　時代をひらくデザイン』、二〇二一）において簡単な紹介を行ってはいる。

7　この年明治四十三年（一九一〇）一月、三越呉服店図案部が意匠部から独立し、非水は同部主任に就任。前掲註（5）参照。

8　非水の妻。自身も歌人として活躍。川越で代々庄屋をつとめた岩崎紀一の三女。兄に福沢諭吉の次女・房子の夫となる福沢桃介がいる。

9　未詳。

10　現在も神田で営業を続ける株式会社文房堂（東京都千代田区神田神保町一丁目二十一―一）のことと考えられる。（図4）非水は、大正九年（一九二〇）に発刊された文房堂カタログの表紙を手掛けている。（図5）

11　一九一〇年五月六日に崩御したエドワード七世のこと。

12　翠子には三人の兄がいたため、岩崎育太郎、福沢桃介、岩崎紀博のいずれかであると考えられる。

13　折井貴恵氏（川越市立美術館主任学芸員）によると岩崎育太郎の長男の名は「晴一」のため、育太郎の子ではないと考えられる。『岩崎勝平読本』巻頭に折井氏の「岩崎勝平覚え書き」があり、その中に勝平の兄弟の名が掲載されている。兄は上から順に、晴一（せいいち）柔二（じゅうじ）陽三（ようぞう）元四（もとし）圭五（けいご）清録（せいろく）弟は末吉（すえきち）重男（しげお）。

14　当館所蔵《杉浦非水宛年賀状》の中に、大槻弐雄からの年賀状がある。ここにある「大槻君」ではないかと考えられる。

15　現住所：東京都港区北青山三丁目五-十七。

16　明治三十九年（一九〇六）博文館が創刊した少女雑誌。明治二十八年に創刊された『少年世界』の姉妹誌で、創刊当時主筆を巌谷小波が務めた。

17　明治三十四年（一九〇一）に設立された。非水は明治四十五年ごろ、この台湾支部の機関紙「台湾愛国婦人」の表紙を担当した。

18　久留島武彦（一八七四～一九六〇）児童文学者。非水とは中央新聞社時代から面識があった。前掲註（5）参照。

19　久留島武彦の長女（図6）。

20　明治四十三年（一九一〇）五月五日に開園した早蕨幼稚園。久留島武彦記念館「久留島武彦年譜」http/kurushimatakehiko.com/about/history より参照。

21　三越児童博覧会。三越は，明治四十二年（一九〇九）四月の第一回を皮切りに大正三（一九一四）年までは毎年「児童博覧会」を開催している。

22　永井荷風は「銀座」において、「自分は折々天下堂の三階の屋根裏に上がって都会の眺望を楽しんだ」（『荷風随筆集（上）』岩波文庫）と記しており、非水も銀座にあった天下堂を訪れたと考えられる。https://www.ginza.jp/column/5828も参照。

23　「自伝六十年（九）中央新聞社時代」（『広告界』第十二巻第八号、一九三五年八月、六七頁）に中央新聞社時代に共に富士山に登った記者の名前として「神東君」と出て来る。

24　未詳。

25　未詳。

26　明治三十四年（一九〇一）に三浦理が神田錦町に創業した有朋堂か。

27　大野雲外（一八六三～一九三八）本名・延太郎。明治時代から昭和時代初期に活動した日本の画工・人類学者・考古学者。

28　明治四十三年（一九一〇）三月二十日、東京都京橋区銀座二丁目一〇番地に開館した発明館のことか。『発明協会七〇年史』（一九七四、発明協会）参照。

29　磐瀬純「自伝六十年（十）三越時代前期」（『広告界』第十二巻第八号、一九三五年八月、六八頁）より「東美で私と同期卒業生の磐瀬純君は既に私より何年か前に入店し、久保田氏の輩下として図案の仕事をやつてゐたのであるが」とある。

30　モーリス・ピヤール＝ヴェルヌイユが著したアールヌーボーと植物について書かれた参考書。彼はウジューヌ・グラッセに師事していた。Maurice PILLARD-VERNEUIL：Etude de la plante son application aux Industries dart,

31　未詳。

32　一八九七年創刊のDeutschen kunst und Dekorationのことか。藤田麻希氏は、非水が大阪時代

に東京美術学校で目にしていた同雑誌を買い求めようとしたこと、三越入社後は同雑誌がいつでも閲覧できる状況であったと記している。藤田麻希「杉浦非水のイメージソース」（『Bandaly』第十二号、二〇一三）参照。

33 Modern kunst のことか。

34 一八九六年に創刊された雑誌『Die Jugend』。

35 中澤弘光（一八七四～一九六四）東京美術学校西洋画科選科で黒田清輝に師事。明治三十四年（一九〇一）七月から非水が黒田邸の書生となってからはともに生活する。同年一二月頃「みだれ髪歌留多」を合作したが、六割進んだところで、非水の養母死去のために中断。「自伝六十年（五）黒田邸寄寓時代」（『広告界』第十二巻第五号、一九三五年五月、七五頁）。二歳年上の中澤のことを非水は兄のように慕い、後年まで親交があった。

36 この絵は明治三十四年（一九〇一）の一〇月頃に制作し、国民美術協会の何回展かの特別陳列として明治時代の肖像画として展覧されたことがあったという。前掲註（35）参照。

37 「現今の大家［七］中澤弘光氏」（『美術新報』九巻九号、一九一〇年七月、一四八頁）に中澤の描いた非水の肖像画が掲載されている。

38 未詳。

39 「華表」は漢語で中国の石柱のことだが、日本ではこれを鳥居の意味で用いることもある。大明敦氏（さいたま文学館主任専門員）にご教示頂いた。

40 未詳。

41 現住所：千葉県千葉市稲毛区稲毛一-十五-一〇、稲毛浅間神社。現在は埋め立てにより、神社と海は離れているが、明治時代にはかなり近い位置関係であったため、海の中に鳥居が立っていたという伝聞が残っているそうであるが、残念ながら神社が不審火によって燃えてしまったため、当時の資料は残っていないという。

42 明治二十一年（一八八八）開業。森鴎外や島崎藤村をはじめ多くの文人が滞在した。河東碧梧桐が著書『三千里』の中で明治三十九年（一九〇六）八月六日、稲毛の海気館に一泊した様子が書かれており、碧梧桐に心酔していた非水がこの文章を読んだ可能性がある。

43 非水が見た画室跡は、和田英作がビゴーから引き継いだアトリエではないかと考えられる。ジョルジュ・ビゴー《稲毛村のわがアトリエ》一八九二～一八九七頃、千葉県立美術館蔵。相川順子氏（千葉県立美術館学芸員）のご教示による。

44 竹貫佳水（一八七五～一九二二）博文館で「少年世界」「中學世界」の編集に従事。

45 前掲註（23）参照。

46 田口米作著『色彩新論』（一九一〇、東陽堂）。

47 未詳。

48 例えば、同年には『七番日記』（一九一〇、一茶同好会）が出版されている。

49 『七番日記』五月の項には「ざぶ〳〵と白壁洗ふわか葉哉」という俳句が採録されており、非水はこの句を意識していたと考えられる。小林一茶『七番日記抄・下』（一九二六、春陽堂）参照。

50 現段階では人物の特定はできていないものの、幸田露伴の子へ土産を買い、非水に理髪の本の表紙図案を依頼していることから出版社の人間と考えられる。

51 未詳。

52 未詳。

53 雑誌『日本及日本人』に「一日一信」として河東碧梧桐が連載していたものが後の「三千里」である。河東碧梧桐『三千里』（一九七三、講談社）、河東碧梧桐『続三千里』（一九七四、講談社）参照。

54 河東碧梧桐（一八七三～一九三七）愛媛県松山市出身。俳人。

55 「四月十三日。小雨。」から始まり、約四ページに渡り、不折俳画の批評が書かれている。河東碧梧桐『続三千里（中）』（一九七四、講談社）参照。

56 日記上では「米子」は十七日に初めて登場するが、本作の画帳のページの順番通りに掲載する。

57 未詳。

58 『みつこしタイムス』のこと。

59 新聞『日本』の「日本俳句」の欄。主任は河東碧梧桐が務めた。

60 俳句雑誌。一八九七年（明治三〇）一月、正岡子規の援助により、柳原極堂（一八六七―一九五七）が松山に創刊した日本派初の俳誌。翌年一〇月、発行所を東京に移して高浜虚子が編集発行を担当。子規一派の機関誌として内藤鳴雪、河東碧梧桐、石井露月、佐藤紅緑らを擁し、新聞『日本』の子規選俳句欄と並び、日本派興隆の拠点となった。一九〇二年（明治三十五）子規没後、虚子がこれを継承し、碧梧桐は「日本俳句」欄を継承した。

61 細川風谷（一八六七～一九一九）明治・大正期の講談師。研友社社友。尾崎紅葉のすすめで号を「風谷」とする。

62 高峰筑風（一八七九～一九三六）筑前琵琶から派生した高峰琵琶の創始者で宗家。本名鈴木徹郎。博多生れ。

63 未詳。

64 小林蹴月（一八七〇～一九四四（?））中央新聞、やまと新聞の記者を歴任し、同紙のほか「文芸倶楽部」などに小説を寄稿。著書に「うもれ咲」「夜半の鐘」などがある。非水とは、中央新聞時代から面識があった。前掲註（23）参照。

65　『東京日日新聞』（一九一〇、五月十九日）付け、「支那では爆竹で彗星を驚かして退散せしめるという奇抜な呪（まじない）があるようだが、米国ではハレー彗星が地球と衝突した場合、その厄を逃るるには、地中に潜っているが一番安全だといって、五六日前から穴居を始めた人があるそうだ。また、日本にも二三日前のこと、日向国延岡町の渡辺某妻は、十九日ハレー彗星が地球と衝突すると下界の人間は皆打殺されるという例の風説を信じて、逆上のあまり卒倒して遂に彼の世の人となった」

66　幸田露伴（一八六七～一九四七）のことか。

67　未詳。

68　日比翁助（一八六〇～一九三一）明治時代から昭和前期にかけての実業家。三越百貨店を創業し三越の経営改革を進め、日本初の百貨店をつくった人物。当時専務取締役。

69　藤村喜七（一八五一～一九二一）三重県生まれ。呉服商の三井呉服店で働き、同店が日本初の百貨店・株式会社三越呉服店になった時に取締役に推される。この当時、三越の常務取締役。

70　現在の東京聖三一教会のこと。一八八九年（明治二十二）より、立教学校（立教学院）に隣接する築地三十九番に赤煉瓦造りの教会が築地の各集会所の会衆と、深川聖三一教会（後の真光教会）から分かれた会衆により発足した。一九〇五年の関東大震災まではこの地に教会があった。https://trinity-tokyo.sakura.ne.jp/pg24.html参照。

71　明治四十三年に泉鏡花著の『鏡花集　第4巻』が発行されているが、従来その装丁は橋口五葉によるものとされている。

72　未詳。

73　久保田米斎か。

74　巌谷小波か。

75　沼田笠峯（一八八一～一九三六）明治から昭和時代前期の編集者、教育者。明治四十年より博文館発刊の「少女世界」の主筆。

76　未詳。

77　久保田米斎（一八七四～一九三七）明治から昭和時代前期の画家。舞台美術家。非水が東京美術学校に入学試験を受けた際、「其合格者の第一位は、後年私が三越へ入った時種種御厄介になつた久保田米齋氏であつた。」とある。「自伝六十年（三）東京美術學校時代（上）」（『広告界』第十二巻第三号、一九三五年三月、六七頁）参照。

78　東京市神田区錦町一丁目十番地にあった「三才社」のことか。

79　「三才社」は、神田教会のフランス人カトリック宣教師ルモワヌ神父が創立したため、「クリスチャン」という言及があると考えられる。

80　前掲註（12）参照。

81　animal vivantのことか。

82　巌谷小波（一八七〇～一九三三）児童文学者。小説家。俳人。一八九五年創刊の雑誌『少年世界』の主筆を務める。

83　現在、当館には所蔵が確認できていない。

84　岡野栄と小林鐘吉は、非水とともに中西屋書店から月に一冊、全三十五冊が出版された『日本一の画噺』シリーズの挿絵を担当したメンバーである。明治四十五年（一九一二）六月、この三人の他に、中澤弘光、山本森之助、跡見泰、三宅克己の七人で美術団体光風会が結成された。

85　傍線は非水によるもの。

86　幕末から明治にかけて、女性の間に流行した日本髪の一種。

87　前掲註（85）同様、傍線は非水によるもの。

88　五月二十二日の夜に制作していた図案と考えられる。

89　前掲註（72）の裏絵と考えられる。

90　未詳。

91　現在の三重県伊勢市。当時は二見町であった。

92　杉浦家戸籍謄本によると、養父杉浦祐明の母セイは明治三十一年（一八九八）に逝去しているため、ここに出て来る祖母とは実父の母と考えられる。

93　実父、白石朝忠のことと考えられる。

94　「自伝六十年（五）黒田邸寄寓時代」（『広告界』第十二巻第五号、一九三五年五月、七三頁）によると明治三十四年に十年ぶりに帰国した父と半月ばかり松山に帰省した後、「父も其後家庭を持つ準備の為」共に東京に帰ったとあるため、父が帰国後に新たに迎えた女性をここでは「母」と呼んでいると考えられる。

95　『渋沢栄一伝記資料』によると「明治四十三年五月十七日　是日栄一、インド、パロダ国国王マハラジャ・サヒブ・ガイカーヲ日本女子大学校ニ案内シ、後、飛鳥山邸ニ招キテ晩餐会ヲ開ク」とある。渋沢青淵記念財団竜門社編『渋沢栄一伝記資料』第三十八巻（渋沢栄一伝記資料刊行会刊、一九六一）参照

96　板谷波山（一八七二～一九六三）陶芸家。一八九四年東京美術学校彫刻科卒業。石川県工業学校、次いで東京高等工業学校に勤務しながら陶磁器の研究を重ね、一九〇四年から東京田端に窯を築いて制作に専念した。

97　稲葉正縄（一八六七～一九一九）もと山城（京都府）淀藩主稲葉正邦の養子となる。明治二十八年東宮侍従、のち式部官。子爵。

98 福島安正の日記には、五月二十五日の項に「宮内省主催後楽園午饗」と記されており、パロダ王の余興に自身も参加した記載がある。『〔福島安正日記　明治四十三年日記摘要　一〕』（一九一〇、国立国会図書館蔵）参照。

99 東京高等工業学校。

100 現在、当館には所蔵が確認できていない。

101 未詳。

102 巌谷小波は午歳生まれに因んで、馬にまつわるものを蒐集していた。「自伝六十年（十一）三越時代中期」（『広告界』第十二巻第五号、一九三五年五月、七五頁）参照。

103 明治四十二年（一九〇九）三越で設立。巌谷小波が幹事役となり、新しい玩具の研究を盛んに行った。そのうちの最も熱心な考案者として坪井正五郎であった。前掲註（102）参照。

104 中央新聞社のこと。非水は明治三十八年（一九〇五）に入社し、明治四十三年（一九一〇）五月一日に退社しているため、「久しぶり」という表現を使っている。

105 広瀬武夫（一八六八～一九〇四）軍人。日露戦争の功績により神田須田町にあった旧万世橋に銅像が建造された。

106 軍人世界社から明治四十二年に創刊された雑誌。

107 森脇忠。（一八八八～一九四九）島根県出身の洋画家。非水が島根の浜田中学校で教鞭をとった際に、指導した生徒。後に東京美術学校に進学し、大正三年（一九一四）に卒業するため、在学中も非水と交流があったことが窺える。

108 未詳。

109 『少年世界』第十六巻十号（博文館、一九一〇年七月）に掲載される「口絵　海の風（彩色凸版）」と考えられる。

110 大岡育造（一八五六～一九二六）明治・大正時代の政党政治家。司法省法学校に学び弁護士となる。非水が三越以前に勤めていた中央新聞社の社長。

111 未詳。

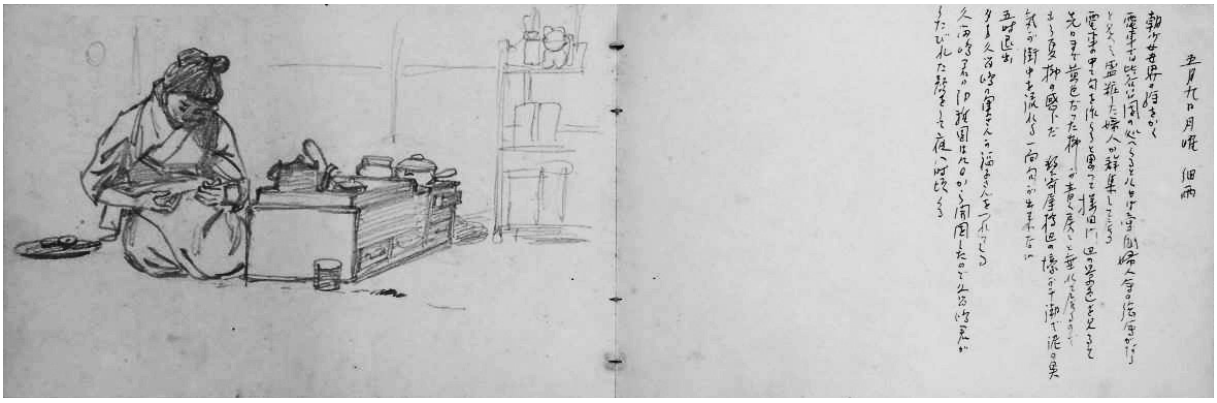
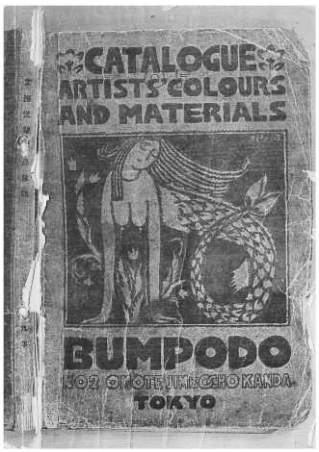


図1：『明治四十三年日記』

図2：5月7日

↓ 図3：5月8日



（右）図4：文房堂外観
（左）図5：
『文房堂カタログ』
（杉浦非水表紙）

図6：5月9日夕

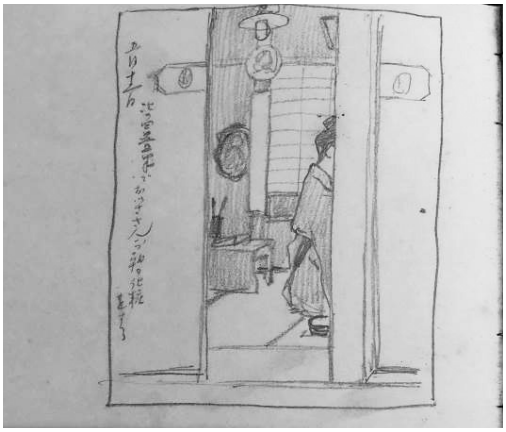


図7：5月12日部分

図8：5月15日夜

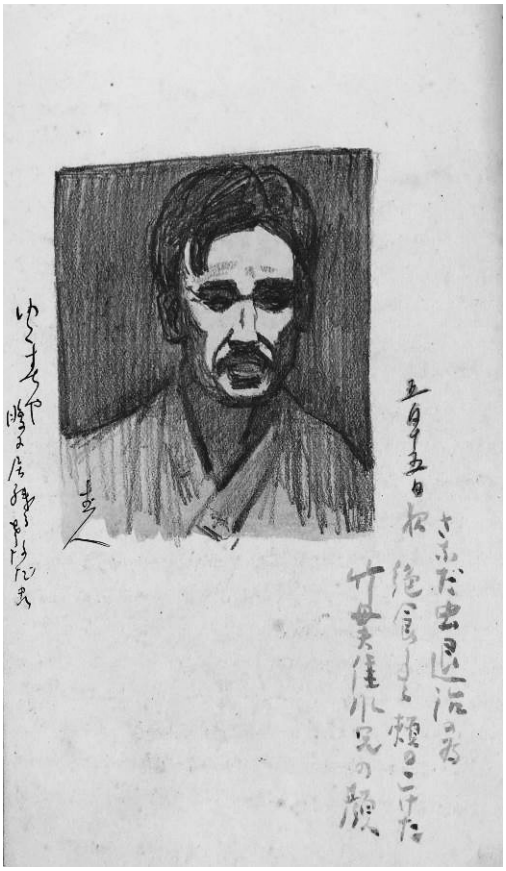


図9：5月15日

図10：5月16日夜

図11：5月16日夜

図12：5月23日（部分）

図13：5月26日部分（印章）

↓ 図14：5月30日